

た　ち　ば　な　新　聞

発行所 宝清寺
〒197-0821
東京都あきる野市小川101番地
電話 042-558-2663

春の彼岸

三月十七日(火)～二十三日(月)

お彼岸にはお花を供え

ご家族で墓参致しましょう



宝清寺の年中行事

二月節分	厄除け・星祭
三月彼岸中日	彼岸塔婆供養
四月八日	花まつり(灌仏会)
四月八日	オリエンテンプリング
七月十七日	お盆塔婆供養
七月十七日	施餓鬼法要
九月彼岸中日	彼岸塔婆供養
十月十二日	お云式法要
十二月初旬	お父金締札

悟りの彼岸に到ることを言います。従って「到彼岸」「到於彼岸」と言います。このような謂われがあるように、お彼岸は悟りを求めて修行に励むことを目的としています。そこで、迷いの此の岸から、悟りの彼岸に到る方法として「妙莊嚴王本事品」に

六つの実践得目が説かれています。

- 一、布施 (他人に施すこと)
- 二、持戒 (戒を守り、人に迷惑をかけず、約束を守ること)
- 三、忍辱 (苦しくとも耐え、怒りの気持ちを起こさないこと)
- 四、精進 (常に努力を惜しまず何事にも全力で臨むこと)
- 五、禪定 (心の統一を心がけ、日常生活で自分を見失わない)
- 六、知恵 (物事を正しく判断する能力を養うこと)

しかし、一週間でこの六つを行うことは大変です。どうすれば良いのか、それは「日蓮宗の在家の誓い」に、常にお仏壇を浄め、お墓参りを怠らず、心からご先祖の追善供養につとめます」という教えを実践して下さい。まずはお仏壇に五供を供えて下さい。

因になっているものと思われま

昔は日本人の場合、個人から家庭へ、村へ、郷里へ、国へ、人類世界へと、段階的な社会共同意識に深い配慮を払ってきた。そうした世界観から、ヨーロッパ的近代思想である、個人が社会や世界を意識した生活をせざるを得なくなったのである。

第二次世界大戦後、**「家」**の概念が変わり、ヨーロッパの近代思想が、日本に持ち込んだ個人主義は、しばしばエゴイズムの形を持って現れます。それは**「競争の原理」**であって、日常では競争することなく生活できた日本人が、競争なしには生活がでなくなっています。

現代社会で、**「私たちが「世の中が異常だ」と感じ、人間関係が希薄化し、孤独感や精神疾患が増えているのは、社会構造の変化が急激であり、それに対するルールや価値観、制度の調整が追いついていないことをどう受け止め、共存していくかが大切ですが、人の道として大切な「恩義」「義理」「人情」等の精神的な面の欠落も大きな原因だ**と思います。

五供とは

- 一、浄水 (これは布施行にあたり、清らかな水をお供えすることによって、私たちもみ仏の清らかな心に心が洗われることを味わうことができます)
- 二、お花 (忍辱にあたり、み仏のひろい心をもつてすべてに耐え抜いていくことのあらわれと言われています)
- 三、お香 (精進にあたり、芳香を放ち続け、み仏の慈悲を一切の人々に行き渡らせることができます)
- 四、飲食 (禅定にあたり、私たちがいたたく主食とおなじものをお供えして、み仏と自分が同一の「いのち」につながっていることを自覚して、心静かに生きる歓びをかみしめることができます)
- 五、灯燭 (光はすべての暗黒を開き、み仏の知恵の光、慈悲の光をたたえます)

お彼岸に、五供をお供えし、お題目修行を重ねていけば、功德が自然に与えられることになります。

お彼岸には、仏壇に五供をお供えし、お塔婆を建てて、ご家族で墓参致しましょう。

管理寺務所からのお知らせ

一、お願い

他宗で橘墓苑の墓地や睡蓮堂を使用されている方がありますが、昨年、それらの墓所に埋葬されている年回忌に当たる方のご供養を、管理寺務所に連絡をせずに、他宗の僧侶のお勤めで、墓前で供養されているのを複数見かけました。

橘墓苑の墓地や永代供養の睡蓮堂・蓮華堂・樹木葬(天空)は、宝清寺管理寺務所が一括管理しています。

ご供養は墓前だけでなく、たちばな会館や水谷庵で法要の後墓前でのご供養もできます。いずれの場合でも、宝清寺男性寺務員が墓前でのお世話をするようにしています。

今後はどのようなご供養でも、実施される場合は、日時、場所、何宗のどこのお寺の僧侶が来られるのかなど、宝清寺管理寺務所にご連絡頂き、打ち合わせを済ませてから実施されるようお願い致します。

一、お知らせ

お塔婆を建てられる場合、宝清寺では六尺の塔婆を使用していました。皆様から持ち運ぶ時に、長くて、重すぎるとのご意見が多数ありましたので、今後は五尺のお塔婆に変更致します。ご了承下さい。

住職ひと口法話 第八十四回

昔より犯罪が増えているわけではないと思われま

高度経済成長期やバブル期に比べ、富の偏在が拡大し、中間層の生活が厳しくなり、大都市の家賃高騰、非正規雇用の増加、将来の年金や医療への不安が重なり、多くの人が生活の不安定さを感じています。また、テクノロジーの発達でコミュニケーション手段は増えたようですが、逆に直接の人間関係が希薄化し、孤独感や精神疾患が増えており、スマホやSNS、ニュースによる情報過多は私たちの精神状態に悪影響を与えています。過剰な情報に振り回され、不安や恐怖心が増幅される傾向があります。そのことが、犯罪や事件が凶悪化・複雑化する原

法華経と私たち 第二十八回

観世音菩薩普門品

第二十五 ②

釈尊は無尽意に答えた。

「もしもその国の衆生が仏の身を以て救うべきであるなら、観世音菩薩は仏の姿で法を説くのである。また辟支仏の身を以て救うべきであるなら、辟支仏の姿で法を説くのである。また声聞の身を以て救うべきであるなら、声聞の姿で法を説くのである。また帝釈天の身を以て救うべきであるなら、帝釈天の姿で法を説くのである。また自在天の身を以て救うべきであるなら、自在天の姿で法を説くのである。また毘沙門の身を以て救うべきであるなら、毘沙門の姿で法を説くのである。また婆羅門の身を以て救うべきであるなら、婆羅門の姿で法を説くのである。また比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の身を以て救うべきであるなら、また比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の姿で法を説くのである。また童男、童女の身を以て救うべきであるなら、童男童女の姿で法を説くのである。また天龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩護羅伽、人非人等の身を以て救うべきであるなら、皆この姿で法を説くのである。また金剛神を以て救うのであるなら、金剛神の姿で法を説くのである。無尽意よ、観世音菩薩はこのように、様々に姿を変えて、諸々の国を遊行し、衆生を救うのである。これゆえに、みな一心に観世音菩薩を供養すべきである。この観世音菩薩は恐怖の危機の最中において、よく無畏・安心を授けるのである。それゆえ人、この菩薩を施無畏者と呼ぶのである」

比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の姿で法を説くのである。また童男、童女の身を以て救うべきであるなら、童男童女の姿で法を説くのである。また天龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩護羅伽、人非人等の身を以て救うべきであるなら、皆この姿で法を説くのである。また金剛神を以て救うのであるなら、金剛神の姿で法を説くのである。無尽意よ、観世音菩薩はこのように、様々に姿を変えて、諸々の国を遊行し、衆生を救うのである。これゆえに、みな一心に観世音菩薩を供養すべきである。この観世音菩薩は恐怖の危機の最中において、よく無畏・安心を授けるのである。それゆえ人、この菩薩を施無畏者と呼ぶのである」

無尽意菩薩は釈尊に言った。
「世尊よ、わたしは今この観世音菩薩に供養します」そして無尽意は、首から幾千萬金の価のある宝珠の飾りを取ると、これを与えて言った。「菩薩よ、この宝珠をどうかお受けとりください」そのとき観世音菩薩はこれを受けとらなかつた。無尽意は再び言った。
「どうか、われらを憐れむと思つて、この宝珠をお受けとりください」

そのとき釈尊は観世音菩薩に言った。
「観世音よ、まさにこの無尽意菩薩と天のものと人と非人と諸々の衆生を憐れむがゆえに、この宝珠を受けるべきである」
観世音菩薩は衆衆を憐れみ、宝珠を受けて二分し一つは釈迦牟尼仏に奉り、一つは多宝仏の塔に奉納した。
無尽意はこれらのことを重ねて詩句を以て唱えた。
このとき、持地菩薩は座より立ち、釈尊の前に出て言った。
「世尊よ、この観世音菩薩品の自在な神通力を聞くものは、大きな功德を得るでしょう」
釈尊はこの普門を説いたとき、集まつた八万四千の衆生は、みな阿耨多羅三藐三菩提を發心したのである。

令和八年度管理料納入のお願い

管理料は、毎年、三月末日が納入期限の前納制になっています。令和八年度までの管理料の納期は三月末日です。

令和七年度までの管理料が未納の方は、早めにお納め頂きますようお願い致します。

納入方法

一 墓参の折、持参にて納める

二 銀行振り込みにて納める

※振り込みの場合の振込先

銀行名 多摩信用金庫 秋川支店
口座番号 普通預金 一五一六二四九
受取人 宗教法人宝清寺代表役員 石井前琮 ぜんそう

三 自動払い込みにて納める

※自動払い込みの場合の手続き方法

① 自動払い込みはゆうちょ銀行のみです。ゆうちょ銀行に口座をお持ちの方が対象になります。

② 自動払い込みご希望の場合は、管理寺務所に指定用紙をご請求頂き必要事項記入後、最寄りのゆうちょ銀行に提出して下さい。

③ 引き落としは、毎年四月二十五日になります。

尚、ご不明な点がございましたら、管理寺務所までお問い合わせ下さい。

お檀家の画家 望月一雄氏寄贈絵画

千手観音・風神・雷神について



十一面千手千眼観世音菩薩立像の「千」は無限を表し、あらゆる方法で人々を救う観世音菩薩の慈悲を象徴しています。千の手、それぞれに眼を備え、頭上に戴く十一の顔、世の中の衆生（人間を始めとするすべての生き物）を救い、現世利益を授ける十一面千手千眼観世音菩薩様で、民衆を救うとき三態に姿を変えると言われています。



『千手観音左に描かれた風神像』



『千手観音右に描かれた雷神像』

十一面千手千眼観世音菩薩を守護し、

仏法を邪魔する悪を退ける守護神で雨を操り、天候を整える。水利や日照りを支配すると恐れられる。髪の毛はすべて逆立ち、口元は牙を出している。手の指は三本で「過去・現在・未来」を表し、足の指は二本で「天と地」を表している。
『十一面千手千眼観世音菩薩立像の慈悲と功德』
十一面千手千眼観世音菩薩立像は、多くの手で衆生を漏らさず救済しようとする広大な慈悲を表しており、合掌する一対の手以外に、合わせて四十本の手を持っています。この多くの手の中には、それぞれ異なる持物（じぶつ）を持ったり、特定の印相（施無畏印）を結んだ手が含まれています。これは十一面千手千眼観世音菩薩立像の多様な救済作用と功德の一つとして表現しています。腕の前で合掌する二本の手を除いた四十本の手が、それぞれ、二十五の世界（三界）を救うもの（四十手×二十五＝千手）として表現されています。四十本の手の平には、それぞれ一個の眼を持っており（四十眼×二十五＝千眼）、どのような衆生をも漏らさず救済しようとする十一面千手千眼観世音菩薩立像の広大な慈悲と功德を表しています。